

「フリーズーム」

「フリーズムーン」・登場人物表

立花先輩

(立花慎之介)

クール。県下最悪と言われる不良学校の不良を束ねるトップ。

卒業とともに東京に行くことが決まっている。

狩野に一目置いている。

狩野

(狩野翔)

熱血漢。立花先輩を慕うナンバー2。

立花の作った校内最大の不良グループを束ねることに不安を感じている。趣味でギターを弾く。

SCENE 1 深夜の廃工場跡

BGM 5

立花ナシ 「十数年前に倒産した廃工場跡で、俺はあいつを待っていた。

バイクの音が近づいてきて、止まった。」

モニター表示 「ぶーーーーん、キキキーーー。」

会場 「ぶーーーーん、キキキーーー。」

立花 「よう。遅かったな。」

狩野 「お待たせしてすみませんでした。」

立花 「なあ、もう一度聞かせ。どうしてこもろぬのか？」

狩野 「はい。よろしくおねがいたします。」

立花 「おいおい。そんな丁寧な口調で来られたら、こっちもやりにくいですよ。」

狩野 「いや、だって、俺は先輩にはお世話になりましたし、今でも尊敬していますよ。」

あの学校のトップとして、拳一つで不良たちをまとめ上げるなんてことは、とてもじゃないけど俺には出来ません。」

立花 「まあ、しきたりみたいなもんだってのは理解してる。」

俺だって、名だたる先輩たちをぶちのめして、腕一本でここまで登りつめたからな。ただな。」

狩野 「ただ？」

立花 「やりたくない相手ってのは何人かいてな。その、一番がお前なんだよ。」

もう一度聞く。どうしてもやるんだな。」

狩野 「はい。俺だって先輩とやりあいたくなんかないですよ。」

正直、勝てるなんてこと想像も出来ませんしね。」

でも、先輩が卒業したら、この街を出て東京に行くって聞いちゃったら、
いてもたってもいらなくなりました。」

立花 「別にいいんだぜ。勝てない喧嘩なんて、やらなくても。」

狩野 「俺からのつまらない饞別ですよ。」

先輩の凄みは近くで見ているから、良く知っています。
でも。

一度もやりあっていないなんてことになったら、俺が舐められちゃうんですよ。

「こいつ世界に生きてたんだから、先輩もわかんじよ。」

立花 「まあ、そつだよな。」

面倒くさいけど、やらなきゃなんねえってことだよな。」

「ええ、お願いしますよ。」

「いいんだな、手加減とか器用なこと俺は出来ねえぞ。」

「上等です。それでこそ、先輩ですよ。」

立花 「まあ、そついつことなら、仕方ねえ。やるか。」

狩野 「行くぞ、おらあめあめ……！」

(殴り合い アドリブ 効果音適時入れつつ)

立花 「はあ、はあ、はあ、はあ。お前強くなったな。」

狩野 「はあ、はあ。先輩が弱くなったんじゃないんですか？」

立花 「てめえ、すいぶんと生意気な口叩けるようになったじゃねえか。」

(ななへさかかる)

狩野 「はっ。はあ、はあ。」

そこらじゅうですよ、普段はクールなのに、喧嘩最中はすぐ頭に血が昇る。

先輩の悪口をいってです。てめえあめあめ……！

(ななへさかかるといふも喧嘩しながら)

立花 「くっ。なめ、覚えてるか？去年ここでやったタイマン。」

狩野 「もちろんですよ、塩学（他校）との抗争でトップ同士のタイマンになった、

あれですよ。だらあめー！……！」

立花 「ふん！そうそう。まああれもやりたくない喧嘩だったんだけどな。」

狩野 「まあ、グループをまとめるってのはそういうことですよ。」

立花 「てめえ、わかった口聞いてんじゃねえよ！おりゃあああ……！」

狩野 「くおっー！」

立花 「この街にはいくつもそんなグループがある。

中にちょっとしたことでも喧嘩ぶっかけてくるような物騒なところもあるしな。

でもな、喧嘩しねえで済むならそのほうがマシなんだ。」

狩野 「んなこたあ、わかっていますよ。」

立花 「おめえは、拳で教えなくてもわかってくれると思っただがなめ。」

狩野 「残念ながら、そこまで、リコウにゃ出来てないですよ。おらあああ……！」

立花ナシ 「数十分の後、狩野は倒れた。」

深夜の廃工場後には風が吹いていた。」

モニター表示 「ひゅうーーーーー」

会場 「ひゅうーーーーー」

(二人ともボロボロ)

立花 「よお、もついいだろ。」

狩野 「ええ、先輩の勝ちでいいです。」

立花 「そっか。……、吸うか？」

狩野 「もうちょっと後で一本ください。」

立花 「なんだよ、泣いてんのか？」

狩野 「泣いてなんかいいですよ。」

立花

「まあ、そっついでにしておいてやるよ。お前、強かったぜ。ふー。」

狩野

「やっぱり、先輩には勝てませんでした。」

立花

「すみませんでしたか？」

狩野

「は。あ。ありがとうございます。」

立花

「なあ、勝ったから少し話聞いてもらってもいいか？」

狩野

「……。は。」

立花

「喧嘩する前に、やりあいたくないって言ったのな。」

あれ、半分は嘘だ。」

狩野

「……。」

立花

「いつかは、お前とやらなぐちやらけねえってことには、ずっと強かった。」

でもな、お前は出来すぎた後輩だった。」

狩野

「あ、ありがとうございます。」

立花 「あの辺にガラスの破片散らばってるだろ。」

あれが月明かりに照らされて輝いてるの見るの、好きなんだ。」

狩野 「どうしたんですか？急に。」

立花 「うるせえ、勝ったんだから話聞けって言ったろ。」

狩野 「すみません。」

立花 「俺たちみたいな不良は、あの割れたガラスみたいなもんだ。」

粹に収まっていられずに割れて散らばっちゃったな。

そんなゴミみたいなガラスでもな、月明かりで輝くことは忘れてないんだよ。」

狩野 「(ゆっくり起き上がって)先輩、そんなこと考えてたんですか。」

立花 「一本吸うか。」

狩野 「あ、じゃあ、いただきます。」

(タバコ渡すく受け取る、火をつけるみたいな動作ありつつ)

狩野 「はあ、やっぱり先輩はデカかったすわ。」

立花 「なあ。」

狩野 「はーっ。」

立花 「お前、来年には卒業するだろ。」

狩野 「はー。」

立花 「進路決まっていなかったら、俺と一緒に東京でデカイことやんねえか。」

狩野 「はいっ。」

立花 「東京で、あのガラスみたいに輝かないかって言ってんだよ。」

狩野 「何やるんですかっ？」

立花 「今度教えてやる。」

狩野 「ええー、それじゃさすがに困りますすよ。」

立花ナレ 「廃工場跡に風が吹いた」

モニター表示 「ひゅーひゅーひゅー」

会場 「ひゅーひゅーひゅー」

立花 「なあ、この風に乗るような翼を広げて、大空に羽ばたこうじゃねえか。」

狩野 「先輩って結構、詩的なんですね。意外でした。」

立花 「あんまり学校では見せない顔だからな。」

俺、東京でロックバンドやろうと思ってんだよ。」

狩野 「え？」

立花 「でな、そのバンドにギターとして入ってもらいたい。」

狩野 「俺なんかでよければ、是非。」

立花 「無茶な喧嘩してギター弾けなくなったなんて、やめてほしいからな。」

それも、お前とやりたくなかった理由の一つだ。」

ふん！（背伸びする）いってって。」

狩野 「大丈夫ですか？」

立花 「ああ、大丈夫だ。」

立花ナレ 「数年後、一つのロックバンドがデビューした。

高校の先輩後輩の二人を軸にしたバンドはその独特な歌の世界で人気を得た。

ファーストアルバムのアルバムタイトルは、『砕けたガラスと月明かり』だったという。」